

歴史を語る建物たち

庄内編
(第5回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

旧白崎医院 (酒田市)



日和山公園の一角に、こぢんまりとした木造の白い建物がある。大正8年に建てられた旧白崎医院で、かつては酒田産業会館の裏手付近にあった。昭和53年に酒田市の有形文化財に指定され、同55年に現在地へ移築された。現存する酒田市の木造洋風建築としては唯一のものである。

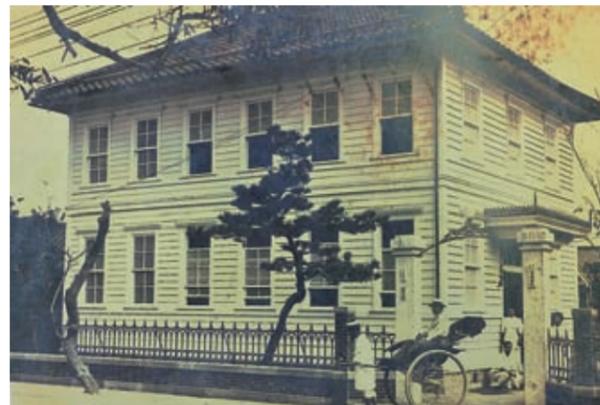
2代続いた外科の名医

白崎医院は、油問屋を営んでいた白崎敬之助が、外科医であった息子の重治のために建てたものである。敬之助は、白崎家出入りの大工・小松友次郎とともに、横浜など各地の洋風建築を視察し、自ら綿密な設計図を描いた。小松も、その図面と敬之助の指示に忠実に従い、敬之助が留守の時は自分も仕事をしない徹底ぶりであった。そのため、大正4年に着工した建物は、完成までに4年かかった。

重治の外科医としての腕前は一流であったが、息子である2代目の重弥もまた、「原爆症研究の父」と呼ばれる旧東京帝国大学の都築正男博士に学んだ名外科医で、手術の腕前は重治以上ともいわれた（佐藤三郎

著『酒田の歴史』)。ただ、跡継ぎがいなかったために、医院は2代目で閉院している。

なお、酒田の医師組織には、江戸時代からの流れをくむ十全堂社と、第二次大戦後に設立された酒田地区医師会があったが（両者は平成23年に合併）、重治は戦時中に十全堂社の社長、重弥も戦後に十全堂社の社長



大正8年頃の白崎医院。開業間もない頃で、人力車に乗った白崎重治医師が外出する様子（往診か？）を写したものだと思われる。写真コピー所有：酒田市立資料館

と医師会の副会長を歴任しており、2人は名医であると同時に、酒田の医学界のリーダー的存在でもあった。

「古ければいい」が評価基準ではない

昭和51年10月29日、わが国の災害史に残る酒田大火が発生した。白崎医院は、焼失は逃れたものの、大火後に作成された「酒田都市計画火災復興土地地区画整理事業」で撤去の対象となった。

しかし、昭和53年6月、山形県文化財保護審議会委員として建物の調査を行った東北大学工学部の佐藤巧教授（当時）は、報告書の中で「現在、文化財に指定されている建造物は明治期までのものが大半であるが、保存の趣旨からすれば古い、新しいという区別だけが指定の基準となるものではない」と指摘し、当時、築60年にも満たなかった白崎医院を「デザイン、材料ともに優秀であり、文化財として保存するに十分値する」と結論付けた。これを受けて、同年9月に酒田市は白崎医院を市の有形文化財に指定し、昭和55年3月、日和山公園に移築復元した。

もっとも、建物の調査がどのような経緯で行われたのかは明らかではない。その点について、酒田の文化財行政に詳しい、市教育委員会文化財係の今野紀生係長は、「区画整理による用地買収で、白崎医院の土地建物は酒田市の所有となったが、市の中で建物の解体を惜しむ空気が強まったために、佐藤教授に調査を依頼することにしたのではないかと推測する。

佐藤教授の報告書にあるとおり、当時は築60年に満たない建物は「新しい」とされ、文化財の対象となるケースは多くなかった。しかし、平成18年に、築51年の広島平和記念資料館（広島市）が国の重要文化財に指定されるなど、今日では、建物の価値は年代だけによるものではないという風潮となっている。その意味で、佐藤教授の指摘には先見の明があったといえよう。

念入りの清掃に感心する訪問客

日和山公園に移築された建物（旧白崎医院）は、現在、酒田市から委託を受けて、市のシルバー人材センターが施設管理を行っている。いつからそのような形態になったのかは定かでないが、平成13年からセンターの事務局長を務める相蘇尚氏が、「自分が着任した時には、すでに委託業務に含まれていた」と話すことから、少なくとも15年近くはシルバー人材センターによって管理されている。

旧白崎医院を担当するスタッフは3人で、1人が3日間ずつ交代で管理している。主な業務は、建物内や敷地の掃除だが、来館者のリクエストがあれば建物の案内もするという。

建物内で特に目を引くのが手術室で、タイル張りの部屋に照明と手術台がポツンと置かれている空間は、あまりイメージをしたくない不気味さがある。それで

も、私を案内してくれたスタッフの方は、「ここで手術を受けたことがあるという方が、懐かしくて来られることもあります」と話す。

ちなみに、2階建ての建物はそれなりの広さがあるにもかかわらず、見事なまでにピカピカだ。敷地も草むしりがされている。「掃除はそんなに大変ではない」とスタッフの方は謙遜するが、来館者に、「中も外もよく掃除が行き届いていますね」と言われるのが何よりうれしいという。

建築100周年を間近に控えて

スタッフの方の許可を得て、受付の芳名帳を拝見したが、県外からの来館者が多いのに驚いた（入館は無料）。「酒田観光で日和山公園に来られた方が、フラッとここ（旧白崎医院）にも寄るのでしょうか」とスタッフの方は話す。

市文化財係の今野係長も、「基本的には観光施設ではなく文化財なので、積極的にPRすることはあまり考えていません。ただ、大変貴重な建物なので、できるだけ多くの方に訪れていただきたいし、市が責任をもってこれからも残していかなければなりません」と力説する。

大正8年（1919年）に建てられた旧白崎医院は、今年（2019年）で築96年目を迎える。筆者が「もうすぐ100年ですね」と水を向けると、今野係長は「言われてみればそうでした。外壁などは定期的に修理していますが、高台にあるので、潮風の被害をまともに受けません。100周年を前に大改修ですね」と笑った。

なお、旧白崎医院では、酒田市在住で国立大医学部へ進学する人への、「白崎資金医学振興奨励金」の贈呈式が毎年行われる。将来の日本の医学を背負って立つ若者たちの晴れ舞台として、これ以上ふさわしい演出はないだろう。

（東北公益文科大学特任講師・山口泰史）



医院内の手術室。一段低く、タイル張りになっているのは、術後に血などを洗い流しやすくするためだろう。右下は、昭和15年頃の手術の様子（はめ込み）。いずれも筆者撮影